

二次的コントロールと調和を重視する文化

竹村 明子

仁愛大学人間学部

Secondary Control and Harmony-oriented Cultures

Akiko TAKEMURA

Faculty of Human Studies, Jin-ai University

Secondary control refers to the control in changing one's way of thinking and values to match the surrounding environment in situations where conflicts arise between the self (personal goals and ideals) and the surrounding physical and social environments. Although such secondary control is interpreted as “giving up” in the West, in East Asia, it is used preferentially and is believed to contribute to people's psychological well-being. Because the concept of secondary control is ambiguous, researchers do not agree on its definition or function. To examine cultural differences in secondary control, this study first examines the issues in the concept of secondary control and the perspectives of current cultural comparative research. Thereafter, it discusses the function of secondary control from the perspective of cultural comparative research, particularly in terms of cultures that place importance on harmony with their surroundings.

Keywords : Secondary control, Harmony, Culture

1. 二次的コントロール研究

日本の社会では自分の意見と相手の意見が対立した時、相手の意見を優先し自分の意見を引っ込めるということはよくある。相手を優先できる事は、周りを配慮した成熟した大人の証と捉えられることもあり、それが後に自分の意見を通す時に助けとなることすらある。しかし欧米の社会では、このような行為は諦めであり、能力の低さを表すと周りから見なされる。そのため心理学のコントロール研究領域では、個人の適応に否定的影響を及ぼし、発達を阻害するとも考えられてきた。

1980年代において Rothbaum et al. (1982) は、それまで諦めと捉えられていた行為、自分の考え方を改めて周りの物理的・社会的環境を優先する方略について、諦めとは異なり適応につながる可能性があること

を指摘した。彼らはこれを二次的コントロールと名付け、特に東アジアなど、周りの人々との関係を重視する社会では、二次的コントロールが優勢であると述べ、文化の違いを視野にいれた研究の必要性について主張した。その後、彼らの逆説的主張に興味を示した多くの研究者により、二次的コントロールに関する研究が進められている。

しかし、二次的コントロール概念の曖昧さから、その定義や機能に関する考え方は、研究者間で異なっている。特に「二次的」という言葉が、二次的コントロールの機能を理解する妨げとなり、結果に関して一致した支持が得られていない。例えば、二次的コントロールは周りを変化させるコントロールが機能しなかった後に用いられる二次的（補償的）な機能しかないという主張 (Heckhausen et al., 2010) や、二次的コン

トロールの優先性を主張したいなら「二次的」という呼び方を捨てるべきである (Skinner, 2007) という指摘がある。また、二次的コントロールを対象とした文化比較研究からも、二次的コントロールの違いが文化の違いのみで規定されるわけではないことが指摘されている。

本稿は、このような二次的コントロールの機能について、文化比較研究の文脈に照らし合わせながら明らかにすることを主な目的とする。特に、二次的コントロールの“周りに調和をしていく機能 (Morling & Evered, 2006; 2007)”に注目し、「二次的」という呼び方に関して再度考察を行っていきたい。そのためにまず、一般的なコントロールや二次的コントロール、現在文化比較研究で注目されている概念について説明した後、二次的コントロールの文化による違いを概観し、「二次的」という言葉の意味について考察してみたい。

1. コントロールとは

コントロールとは対象物を制御・統制する行為である。心理学の立場において、Thompson (1981) は認知的な立場から「ある出来事の回避性に影響を与えることができる反応を、自分が自由にできるという確信」と定義し、Skinner et al. (1988) は「コントロールの主体 (Agent) が望ましい結果を生み出すことができる度合い」と定義している。また Heckhausen et al. (2010) は、「周りをコントロールできる能力 (Control Capacity)」と「周りをコントロールしようとする行為 (Control striving)」を分けて捉えている。各研究者の定義は少しずつ異なっているが、コントロールとは主に「自分がどれだけ効果的に周りの状況を変えることができるかという主観的認知」とまとめられる。主流となるコントロール理論は、このような定義を基に様々な検討が行われてきた (Skinner, 1996)。

White (1959) は、ヒトは自分がおかれた状況との主体的・能動的なかわり方を通して、自分の行動がどれほど効果的であるか確認したいという感情 (効力感 a feeling of efficacy) を持ち、その感情経験を求めて能動的に努力を払うと述べている。de Charms (1968) は、人間の動機づけの根源には「自分自身

が、外界の変化の原因となることの認識」があると考えた。そして、自分の運命を支配しているのは自分自身であり、自分には潜在的な力があると感じる者は、積極的で楽観的で自信がある。一方で、自分の行動の原因が外にあり、運命や他者に動かされていると感じる者は、自分はやつり人形にすぎないと感じ、消極的で、自己防衛的で、決断力に乏しいと主張している。Bandura (1977, 1982) は、ヒトはある目的を達成しようとする場面では、どんな手段を用いれば目的を達成できるのかという確信 (結果期待: outcome expectation) だけでなく、自分にその手段を用いる能力があるだろうかという確信 (自己効力 self-efficacy) を基に行動をおこす。特に後者の自己効力が動機づけに重要であると指摘している。一方で、Seligman et al. (1968) は、望む結果を得るために周りをコントロールしようと何度努力しても、その結果になんら影響をもたらさない場合、ヒトは無力感を学ぶと主張した。いわゆるコントロール感の欠如した心理状態であり、ひとたびこの無力感が学習されてしまうと、たとえ自分の力で解決することができる場面においても、情緒的に混乱し、能動的行動がとれなくなると指摘されている。これらの理論に共通する考え方は、自己と周りの物理的・社会的環境との関係において、自己が周りの環境をコントロールし変えることができる場合には自己の well-being は高まり発達が促されるというものであった。そのため、1980年代ごろには、周りの物理的・社会的環境により自己が変化させられる場合には無力感に陥り発達が阻害されると捉えられてきたのである。

このようなコントロール理論に対して、他の視点から批判を加えたのが Rothbaum et al. (1982) の二次的コントロール概念である。

2. コントロールの2過程理論

どんな文化であろうとも、周りの環境や他者と自己との間で適切なバランスをとることは、個人の身体的・心理的 well-being にとって重要な要因となる。その時個人は、周りの環境や他者をコントロールし変化させることもあれば、彼ら自身をコントロールし変化させることもある。Rothbaum et al. (1982) や Weisz

et al. (1984) はこれら2つの方略を区別し、周りの環境や他者を変える方略を **Primary Control** (以下、一次的コントロール) と呼び、周りに合わせて自分を変える方略を **Secondary Control** (以下、二次的コントロール) と呼んだ。そして、人々が所属する文化により、どちらが優先して用いられるのか、どちらがより適応に寄与するのかは異なると指摘したのである。例えば Weisz et al. (1984) は、一次的コントロールはアメリカの文化で重視されているが、二次的コントロールは日本や東アジアの文化で重視されており、自律性と調和に対する文化的価値観の違いを反映していると述べている。

1) 一次的コントロール

一次的コントロールでは、コントロールの対象は物理・社会的環境における既存の外的現実である。個人は、自分の持つ目標や理想を実現するために、周りの物理・社会的環境を変化させようと試みる。そして自分が期待した通りに周りの環境が変化するならば、目標や理想の実現だけでなく、自分の能力の高さも確認することができる。これが個人にとっての報酬となる。すなわち、“個人的な主体性、優位性、あるいは攻撃性”を用いて、“既存の現実(例えば、他の人々、状況、症状、行動問題)に影響を与え変化させることによって、個人は自分の報酬を高めようとする”のがこのコントロールの特徴である(Yamaguchi & Sawaumi, 2019)。文化的背景を考慮するなら、個人が他者と独立しており、個人の能力の高さが重視され、個人が手を加えなければ状況は変化をしないと考える文化において、適応的に機能する方略ということもできる。

Rothbaum et al. (1982) が二次的コントロールを提唱した時に、主流となっていたのがこの一次的コントロールの概念である。

2) 二次的コントロール

二次的コントロールでは、コントロールの対象は自分自身である。個人は周りの物理・社会的環境に調和することを重視しており、その環境に適応するように自分の考えや価値感、行動を調整しようと試みる。そして上手く状況と調和することができるならば、安心感や居場所感を得るだけでなく、自分の適応能力の高さを確認することができる。これが個人にとっての報酬

となる。すなわち、個人は“既存の現実に応じ、既存の現実を変えることなく、現状の満足度や適合度を最大化することで報酬を高めようとする(Weisz et al., 1984)”のがこのコントロールの特徴である。文化的背景を考慮するなら、個人は周りの環境や他者と依存関係にあり、環境や他者との調和を保つことが重視され、個人の意志とは関係なく周りの環境は変化すると考える文化において、適応的に機能する方略ということもできる。

Rothbaum et al. (1982) は、二次的コントロール概念を加えることにより、既存のコントロール理論や実証研究をさらに発展させることができると主張した。特に、人々の心理が文化により異なることが指摘されている現在において、コントロールと文化の関係を明らかにするためにも、二次的コントロール概念の導入は必須であると指摘したのである。

3) 日本における二次的コントロール

Azuma (1984) は、Rothbaum et al. (1982) の二次的コントロール概念には、一つの概念の傘下に異なるコントロールが混在していること、二次的コントロール方略は日本社会において顕著になると述べながらも日本的視点からの検討が乏しいこと、などの指摘を行い、以下のような問題をあげている。

第1の問題は、二次的コントロールが目標達成を目的とする行為なのか、それとも目標を諦める行為なのか不明瞭であるという点である。Azuma(1984)は、日本のことわざを用い、同じように状況に合わせる行為にも目標を目指すものと目標を諦めるものがあると述べている。例えば、“長い物にはまかれろ”は敗北感を回避するために目標を諦める行為である。しかし、“負けるが勝ち”はセルフコントロールができる成熟を示すことで他者からの信頼を勝ち取り、長期的な視点で自分の目標達成を可能とする行為として捉えることができる。Azuma (1984; 東・柏木, 1989) は、“負けるが勝ち”のような行為を、受容的でありながら芯の強い意欲と述べており、このような意欲をもっと研究することが必要であると示唆している。

第2の問題は、統制困難な状況に関する日米の考え方の違いに関することである。Azuma (1984; 東・柏木, 1989) に従うなら、欧米と日本では行動(原

因)と結果の捉え方に違いが見られるという。例えば、欧米では行動と結果の結びつきが一義的に捉えられているため、人々は一次的コントロールを用いることで状況変化を期待し、二次的コントロールを用いることで状況の不変を予測する。そのため、統制困難な状況下において一次的コントロールを用いても状況変化が生じないと、無力感(helplessness)に陥ってしまう。これに対して日本人は、“原因と結果はたしかに関係があるが、しかしそれはあくまで確率的なもので、‘誰のせい’とはいってもそれは必然性によって原因と結果を結びつけていない(東・柏木, 1989, p.169)”。すなわち、日本人は状況の変化は個人の統制外にあると考えているために、統制困難な状況下で一次的コントロールが状況変化をもたらさなくても無力感に陥ることはない(例、“人事を尽くし天命を待つ”), または統制困難な状況下で二次的コントロールを用いても、状況そのものがいつかは変化することを予想する(例、“果報は寝て待て”)という。Azuma (1984)と同様に、仏文学者の野内良三(2008)は、人生で出会う人や、事物、出来事を、西洋人は何らかの原因の結果生じる必然と捉える傾向が強いものに対して、日本人は偶然と捉える傾向が強いことを指摘している。そして“日本人は世界の有限性(無常性)を認めてその事実を甘んじて受け容れるが、その世界観には神も外部も目的論も無縁である。(中略)したがって無常の美学はペシミズムにはなりえても、厳密な意味でのニヒリズムとは無縁である(野内, 2008)”と述べており、日本人の場合、行動と結果の随伴性認知の破綻が、無力感(ニヒリズム)に結びつかないことを示唆している。これらのことを考慮するならば、統制困難な状況における行動と結果の随伴性に関して、どのような知識や理解をもっているのかにより、一次的コントロールおよび二次的コントロールに違いが生じると考えられる。

第3の問題は、二次的コントロールの主体は、自分以外のものなのか、それとも自分自身なのか、に関する問題である。コントロールには、コントロールを行う主体と、コントロールを受ける対象がある。Rothbaum et al. (1982)では、“一次的コントロールの主体は自分、コントロールの対象は状況である。そ

して、二次的コントロールの主体は自分以外、コントロールの対象は自己である”と言及されており、状況や、環境、他者、集団が二次的コントロールの主体であると捉えられている。しかしAzuma (1984; 東・柏木, 1989)は、二次的コントロールが主体的に用いられる可能性について以下のように示唆している。

がまんできた子どもは、そのこと自体に満足し、有能感や自尊の感情を味わいます。それは、いやなストレスに耐えがまんできたことへの満足であると同時に、それ以上に、重要な他者が望んでいるがまん強い良い子になり得たことへの満足です。子どもは、単に他者の願いや期待に沿うようにしたのではありません。その他者の願いを受け入れることやがまんすることの価値を、子どもは自分自身の価値として内面化しているのです(東・柏木, 1989, p.173)。

すなわち、状況の価値を内面化する過程は、自分で自分をコントロールしていく過程と置き換えることができる。野内(2008)も、“自然(状況や環境)の無限大に対する人間の微小というこの悲痛な事実”に関して、西洋は自然(状況や環境)を自己と区別して分析しその根拠(法則)を解明しようとしたものに対して、日本人は謙虚に自然(状況や環境)をそっくり受け容れ自己を自然の一部とする、と述べている。このような自己を自然(状況や環境)の一部と捉える日本人観はAzuma (1984)の考え方と符合する。さらにDeci and Ryan (1985; Ryan & Deci, 2000)は、活動の価値が内面化されるに従い、外的要因(例、他者や報酬)に動かされていた外発的行動が、内的要因(例、自発性)による内発的行動に変わると述べている。Deci and Ryan (1985)のこの考え方を基に、竹村(2010)は、介護士を目指す学生が、介護の価値を内面化する過程(介護実習)を通して、勉強に内発的に取り組むように変わった事を明らかにしている。二次的コントロールとは、このように主体的に行うコントロールなのか、状況に強制されて行うコントロールなのか、検討する余地がある。

II. 文化比較研究

文化比較心理学では、心理と文化は相互に影響・規定しあう関係であるとし、心理的プロセスそのものが文化によって異なるという立場をとる。そのため、西洋と東洋でみられる心理学的知見の不一致は、出来事の意味そのものが文化によって異なる可能性を指摘している (e.g., Nisbett, 2003)。同様にコントロールの文化による違いも、個人が状況をどのように認知し、どんな価値感を持っているのかにより説明できると考えられている。本セクションでは、最近の文化比較研究によって明らかにされてきた欧米と東アジアとの違いについて述べる。

1. 個人主義と集団主義

心理学領域における文化比較研究で、最も長く用いられている概念は個人主義と集団主義である (Triandis, 2007)。

個人主義社会では、個人の独立性、自律性、個人の権利や自由を重視する。この文化では、個人が自己の目標や幸福を追求することが重要であり、自己実現や自己主張が尊重される。そのため個人主義社会では、個人が周りの物理・社会的環境を変化させることが、成功や能力の高さと評価される傾向にある。一方で集団主義社会では、共同体やグループの一体感・連帯感が重視される。この社会では、個人は所属する集団や家族の利益を優先し、集団全体の共通目標や価値感が重視される。そのため集団主義社会では、個人の行動は集団全体の利益や調和を維持するために調節されることが一般的である。Hofstede (2001) は個人主義－集団主義の軸を用いて複数の国を比較し、最も個人主義得点が高い値を示したのはアメリカであると報告している。この結果から、多くの東アジア研究者は個人主義のアメリカ対、集団主義の自国を比較した検討を行ってきた。

コントロールとの関連を推測するならば、個人主義社会では、個人が自分の目標や幸福を追求することが重要であることから、自己に合わせて周りの物理的・社会的環境を変化させる一次的コントロールが重視される。一方で、集団主義社会では、個人は所属する集団や家族の利益を優先することから、周りの物理的・

社会的環境に合わせて自己を変化させる二次的コントロールが重視されると考えることができる (Weisz et al., 1984)。

2. 独立的自己観と協調的自己観

Markus and Kitayama (1991) は、自己に関する文化比較の立場から、人々の自己観は基本的に2つの視点から捉えることができると述べている。彼らによれば、欧米の文化は自己に関して他者とは独立した視点を持っており、社会的文脈とは切り離れた個性的で安定した自己観を形成する。一方で東アジア文化では自己に関して他者と依存した視点を持っており、状況依存的で他者とつながった自己観を形成する。

Markus and Kitayama (1991) は、独立的視点をもった個人は自己表現、独自性、自己実現を目指し、個人的な考えや感情、目標に基づいて行動すると述べている。また自己の個人的属性を高めることを志向するため、達成場面において自らの能力を評価・確認するように動機づけられる。一般的に西洋人は、他者と異なる個性を望み、対人関係は個人的な成功を阻むこともあるという信念を持っており、対人関係よりも個人的な成功を重視する。

対照的に、相互依存的な自己観を持つ人は、状況に応じた規範や期待に基づいて行動し、社会的調和を維持しようと努力する。また対人関係の規範や価値観に自らが調和するか否かを考慮し、自己の定義は状況やその場の他者によって異なると思われる傾向が高い。そのような自己観が共有されている東洋において、文化的に認められた人間像は、自らを意味のある社会関係の重要な一部分として認識し、周囲の人にそれを認識されることで well-being が獲得される。集団目標と協調的な行動に関心が高く、対人関係の維持が主要な目標であり、個人の成功よりも重視される (Nisbett, 2003)。

彼らの文化的自己観に関する概念は、社会心理学、人格心理学、発達心理学に影響を与え、認知スタイル、幸福感、自己調整などとの関連について多くの実証結果が報告されている。コントロールとの関連を推測するならば、独立的自己観が優勢な文化を持つ社会では、個人は自分の考えや目標に基づいて行動する傾向が高いことから、一次的コントロールを志向すると考えら

れる。一方、相互依存的な自己観が優勢な文化を持つ社会では、個人は調和を維持しようと努力する傾向が高いことから、二次的コントロールを志向すると考えられる (Kitayama et al., 2007)。

3. 分析的思考と包括的思考

近年、知覚認知過程における文化の影響に注目が集まっている。Nisbett (2003) によれば、欧米人は文脈に依存しない、分析的な知覚プロセスを行う傾向があり、顕著な主要物をその文脈とは無関係に注目する。一方、アジア人は文脈に依存し、全体論的な知覚プロセスを行う傾向があり、対象物と対象物がおかれている文脈との関係に注目する。最近の研究では、このような文化的な違いの根底にある知覚・認知的メカニズムが検討されており、異なる社会的慣習に参加することが、知覚の慢性的な変化と一時的な変化の両方につながることを示されている。これらの知見は、文化的文脈と知覚認知過程との間にダイナミックな関係があることを示唆している。

このような包括的／分析的思考の違いに関して、Kim et al. (2016) は、アメリカの高齢者と韓国の高齢者の健康食品への志向に関する調査を行い、韓国の高齢者がより包括的な自然食品（例、蜂蜜、緑茶）を摂取する方が健康に役立つと考え、アメリカの高齢者はその逆であることを報告している。すなわち包括的思考は、健康食品の要素（何が入っているか）よりもその機能（全体としてどのように働くのか）に注目していると解釈している。また de Oliveira and Nisbett (2017) は、包括的／分析的思考の違いは、西洋と東洋の違いではなく、文化の違いとして捉える必要があることを示している。彼らは、ブラジル人、北米人、中国人の認知スタイルについて検討を行い、複数の調査にわたりブラジル人は北米人より集団主義の傾向が高く、中国人よりも感情表現は状況により変化する（状況依存である）と思考していることを報告し、西洋文化のグループの中にも包括的思考が見出されることを報告している。

包括的／分析的思考とコントロールの文化差について直接検討した研究はないが、コントロールの所在との関連に関しては報告がある。San Martin et al.

(2019) は米国、スペイン、イスラエル、ナイジェリア、モロッコといった多様な文化において、対人関係の流動性が低い文化的背景を持つ人は、流動性の高い文化的背景を持つ人に比べて、包括的思考の傾向が高く、内的統制の所在意識が弱く、外的統制の所在意識が強くなることを報告している。統制の所在とは、周りの出来事や状況の変化の原因が、自分にあるか、自分以外にあるかに関する意識のことである。自分がコントロールしたから周りの状況が変化したという意識は内的統制の所在と呼ばれ、自分とは関係がない要因（例えば、運や時間の経過など）により周りの状況が変化したという意識は外的統制の所在と呼ばれる。San Martin et al. (2019) の結果は、対人関係が固定化した社会ほど、包括的思考や外的統制の所在意識の傾向が高く、自分のコントロールとは関係なく周りの状況が変化することがあると考えている可能性を示唆しており、翻って二次的コントロールの傾向も高くなる可能性を示しているといえる。しかし包括的思考と二次的コントロールとの直接的関係について検討することは、今後の課題として残っている。

4. 自主性と周りへの調和

Yamaguchi and Sawaumi (2019) は、自主性と周りへの調和という視点から、欧米と東アジアとの違いについてまとめている。彼らが定義する自主性とは、自己の意志や独自性を重視する傾向をあらわす言葉である。一方、周りへの調和とは、自分を取り巻く対人関係や物理的環境との間に適応的調和を見出そうとする傾向を表す言葉である。Yamaguchi and Sawaumi (2019) は、自主性は欧米で重視され、周りとの調和は東アジアで重視されると述べている。

例えば、Shigaki (1983) は、日本の保育士が最も大切にしている保育に関する価値観は、子どもたちの調和的対人関係を築く能力を育むことであったと報告している。Han and Shavitt (1994) は、米国と韓国の代表的な雑誌に掲載されている広告を分析し、アメリカの雑誌広告では個人の利益や好みに関する話題を掲載しているのに対し、韓国では集団内の利益、調和、家族の統合性に関する話題を掲載していることを見出している。Kim and Markus (1999) は、同様に、

幅広い分野の雑誌（ビジネス、文化、女性向け、若者向けの雑誌）の広告において、アメリカでは自己の独自性を強調する広告が多かったのに対し、韓国では社会における調和に焦点を当てる広告が多かったと述べている。Prunty et al. (1990) は、日本の大学生はアメリカの大学生に比べ、議論することが少なく、集団の調和を重んじ、論争を避けることを報告している。Ohbuchi et al. (1999) は、日本とアメリカの大学生に葛藤場面を想起させた後、その問題解決に関して回答を求める調査をしている。すると日本の学生は相手との対立を避ける傾向があるのに対して、アメリカの学生は自分の要求を強く主張する傾向があった。さらに、日本人学生にとって最も重要な目標は相手との良好な関係を維持することであり、アメリカ人学生にとって最も重要な目標は自己の主張の公平性の回復であることがわかった。さらに、大淵・福島 (1997) は、日本の大学生において、対人葛藤場面において、関係性を保とうとする目標が高いほど、和解的解決戦略をとろうとすることを明らかにしている。

まとめるなら、東アジア、特に日本や韓国では、調和を重んじ、対人葛藤場面では調和の回復を目的とするような行動を用いる傾向があることが示唆されており、二次的コントロールを志向する傾向が高い。一方アメリカでは、自己の意志や独自性を重視する傾向があり、自己の理想や目標を優先し周りの状況を変えるコントロール（一次的コントロール）を志向する傾向が高いといえることができる (Yamaguchi & Sawaumi, 2019)。

III. 二次的コントロールの機能

実は、二次的コントロールの機能に関して、大きく異なる2つの立場があることが指摘されている (Morling & Evered, 2006)。一つは一次的コントロールが機能しない場合の補償機能に注目した立場であり、もう一つは周りの環境との調和機能に注目した立場である。前者の機能に注目した場合、二次的コントロールは文化を超えて同じように機能すると考える。一方で後者の機能に注目した場合、調和を重視する社会（例、東アジアなど）では二次的コントロールが重要な機能を果たすと考えることができる。

1. 二次的コントロールの補償機能

Heckhausen and Schulz (1995; Heckhausen et al., 2010) は、個人が環境を統制し、特定の欲求や能力を発達させるためには、一次的コントロールこそが重要であり、個人は先ず一次的コントロールを用いようとする (Primacy of primary control)。しかし、周りの状況が統制不可能な状況であったり、自分の能力が低下してきた状況では、周りを変化させることができず、個人は（しかたなく）二次的コントロールを用いると述べている。すなわち二次的コントロールの適応的価値は補償的機能に限定されることを主張したのである。一次的コントロールが失敗したり、周りの環境を変化させられないことは、個人の能力の低さを表しており、それは個人の自尊感情や自己効力に対する脅威となる。そこで個人は二次的コントロールにより、自分が求めていた目標や欲求は重要なものではなかったと自分の認知を変えることにより、自己を防衛する。そして能力が低いという脅威の否定的影響を抑制し、将来に備えて動機づけを維持しようとするというのである。

Heckhausen と同僚は、一次的コントロールを優先して用いることは、文化や時代を超えて普遍であり、生物学的進化の立場から見ても示唆されると述べている (Heckhausen and Schulz, 1995)。事実、二次的コントロールの補償機能に注目した研究結果は、様々な文化的背景のもとで検討され、同様の結果をもたらしている。

しかしこの主張に対して、Gould (1999) は、Heckhausen と同僚の考えは、主として生物学的観点から述べられており、文化的観点を無視していると指摘した。確かに人類が生存するには一次的コントロールにより、周りの環境を変えることが必須であった。そして、もし直接周りの環境を変えることがハーモニー（調和）を乱さないならば、一次的コントロールは well-being をもたらす最も有効な方法となるが、東アジアのように周りの物理・社会的環境との調和を重視する社会では、二次的コントロールを用いて調和を維持することが先ず優先されるのではないかと指摘したのである。

2. 二次的コントロールの周りへの調和機能

Morling and Evered (2006) は、多くの二次的コントロール関連研究のレビューを行い、二次的コントロール研究は Control-focused Secondary Control と Fit-focused Secondary Control の2つのモデルに分かれると指摘した。第1の Control-focused Secondary Control (以下、コントロール感焦点型 SC) モデルとは、二次的コントロール機能を、コントロール感を維持する機能に焦点を当てたものであり、上述した Heckhausen et al. を中心とした立場の研究者が定義する二次的コントロールの視点である。このモデルでは、個人はコンピテンス（主観的有能さ）を確認したいという基本的欲求に動機づけられていると捉えている。第2の Fit-focused Secondary Control (以下、調和焦点型 SC) モデルとは、状況と調和しようとする二次的コントロールの機能に焦点を当てたものである。このモデルでは、個人は複数の欲求（自分自身をコントロールできることを確認したいという欲求や、他者との関係性を維持したいという欲求など）を満たしたいということに動機づけられていると捉え、一次的コントロールの高低に関わらず二次的コントロールは状況に自己を合わせるように働くと考えている。

コントロール感焦点型 SC の立場は、コントロール感を維持することが個人の報酬であると考えた視点であり、White (1959) の効力感や deCharms (1968) の指し手認識（自律性）、Bandura (1977) の自己効力の考え方に沿ったものであり、従来のコントロール理論になら新しい視点を提供できない。それに対して、調和焦点型 SC の立場は、周りの物理・社会的環境に調和することが個人の報酬となると考える視点であり、これまで見過ごしてきたコントロール（二次的コントロール）について研究する意義を唱えることができると思われる。Morling and Evered (2006) も、調和焦点型 SC の立場の方が、Rothbaum et al. (1982) の考え方に沿ったものであると指摘している。

さらに Morling and Evered (2006) は、調和焦点型 SC には、現在の状況を受け入れること「受容」(acceptance) と、その状況に合わせて自己の認知および行動を変えること「自己調整」(self-adjustment)

の二側面があり、両側面があることが適応に寄与すると述べている。彼らによれば、「受容」は、二次的コントロールの必須条件だが、受容するだけでは「諦め」と「諦めない二次的コントロール」を区別できないという。すなわち、“自己（の価値観や考え方）を変えずに周りを受容すること”は一種の諦めであるが、“状況に合わせて自己（の価値観や考え方）を変え、状況を受容しすること”は目標を諦めないコントロール方略である。Morling and Evered (2006) によれば、調和焦点型 SC は後者の諦めない二次的コントロールを指すという。彼らは、コントロール感焦点型 SC も調和焦点型 SC も Rothbaum et al. (1982) 論文に見出されるが、コントロール感焦点型 SC は White (1959) などのコントロール理論に沿った考え方であるのに対し、調和焦点型 SC は状況と自己とのバランスのとり方に焦点を当てており、“状況に合わせて自己を変える”という二次的コントロールの本質をより良く示している指摘している。

3. 二次的コントロールと自律性対調和

Heckhausen and Schulz (1995) のコントロール焦点型 SC 理論の重要な仮説は、心理的 well-being が自律的感覚（自己効力や自尊感情に関連する）のみに依拠するものと考えていることである。自律性が心理的 well-being に不可欠のものであるという文化ならば、心理的 well-being は一次的コントロールによってのみ高められると考えられる。一方、周りの物理・社会的環境に調和することが心理的 well-being に必要であるという文化ならば、二次的コントロールも心理的 well-being をもたらすと考えることができる。

Yamaguchi and Sawami (2019) は、どのようなコントロールを用いるのかは、単に欧米と東アジアの違いではなく、自律性を求めるのか、周りとの調和を求めるのかにより、異なると考えた。そして Figure 1 で示したモデルを提示している。Figure 1 は、心理的 well-being への2つの代替ルートを示している。上のルートは、自律性を重視する個人が選ぶルートを示している。このルートでは、望みどおりに周りの物理的・社会的環境を変えているのが自分であるという感覚（コントロール感）が自律性の感覚を高めるため、

個人は環境を直接コントロールしようとする。一方、下側のルートは自律性を必要としない、状況にうまく調和することにより心理的 well-being に至るルートを示している。このルートでは、物理的・社会的環境に自分はうまく合わせることができているという感覚が、環境とのハーモニー（調和）の感覚を高めるため、個人は二次的コントロールを用いる傾向が高くなる。Yamaguchi and Sawaumi (2019) によれば、西洋では自律性は主要な要因ではあるが、モデルが示すのは自律性がなくても心理的 well-being は得られることを示している。ある人々にとっては自律性より周りとの協調がより重視される。よって、自律性を獲得するより、調和的關係を獲得する能力により、自己概念が影響をうけている可能性がある。もしそうなら、個人の自尊感情は、周りを変える能力を獲得するより、周りとの協調關係を維持する能力により規定されるといえる。

しかし、個人は一つの過程に固執する必要はない。どちらの過程を選ぶかは状況により異なる。たとえば Sawaumi et al. (2015) は、日本人であっても、重要な仕事のパートナーがプロジェクトに一生懸命取り組んでくれない場合など、緊急性が高いほど一次的コントロールを用いる傾向が高まることを明らかにしている。Yamaguchi and Sawaumi (2019) は、両過程を選べることは適応的なことだと述べている。東アジアでは、一般的に下の過程が求められる傾向が高いが、彼らも上の過程を選ぶことができる。なぜなら自律性も周りとの調和も、どんな文化でも価値あるものであり Figure 1 で示された 2 過程は両立できないものではないと述べている。

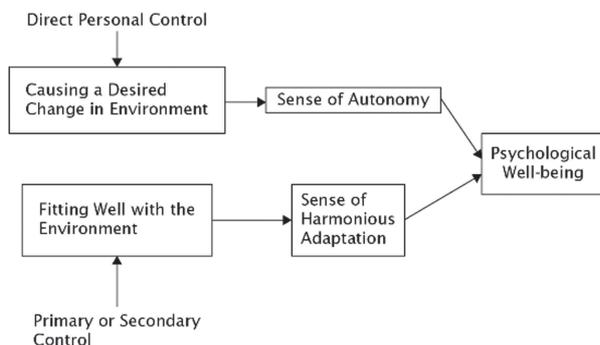


Figure 1 Two Alternative routes to psychological well-being. (from Yamaguchi & Sawaumi, 2019, p.530).

IV. 討 論

ここまで、二次的コントロールに注目し、文化比較研究の視点から、二次的コントロール機能の捉え方に関する違いについて述べてきた。

「一次的」と「二次的」の意味について、Heckhausen and Schulz (1995) は、最初に用いられるコントロールを一次的コントロール、一次的コントロールが機能しない状況で二次的に（時間的に後に）用いられるのが二次的コントロールという解釈をしていた。この意味における二次的コントロールとは、あくまで一次的コントロールの補償的機能と捉えていた。

しかし、自己と他者との關係を協調的と捉える文化や、周りの物理的・社会的環境に注意を向ける文化、周りとの調和に価値を置く文化では、周りの状況に合わせて自己を調整する方略、二次的コントロールが優勢となることが示唆されていた。すなわち、二次的コントロールとは、単に一次的コントロールが機能しない時の補償的コントロールの意味以上のものがあることが多くの状況に示されているといえる。これからは「二次的」という言葉の意味を問い直す必要があるだろう。

一般に「一次的」には「基本的・主要な」という意味をもつ。その意味への対語として「二次的」を使うならば、「主要ではない・重要度が低い」という意味を当てはめることができる。1980年代までコントロール理論は自律性に価値を置く欧米の考え方を基に構築され、自己が周りの環境をコントロールする一次的コントロールに注目を集めてきた。しかし、周りとの調和に価値を置く東アジア文化の考え方の立場に立つならば、いままで「主要ではない・重要度が低い」と考えられてきた、周りの環境に合わせて自己を変えるコントロールにも注目すべきであるという Rothbaum et al. (1982) の主張の正当性を支持することができ、彼らの考え方を今後につないでいくためにも、「二次的」という言葉を使い続けることに意味があると思われる (Morling & Evered, 2007)。

ただし、多くの二次的コントロール研究を振り返るなら、一次的コントロールの補償機能としての二次的コントロール研究の報告例が多く、周りとの調和に焦点を当てた二次的コントロール研究例はまだ少ない

(Morling & Evered, 2006). 今後は文化の価値観との関係を考慮しながら、二次的コントロール研究が進んでいくことが望まれる。

引用文献

- Azuma, H. (1984). Secondary control as a heterogeneous category. *American Psychologist*, 39 (9), 970-971.
- 東洋・柏木恵子 (1989). 教育の心理学：学習・発達・動機の視点. 有斐閣
- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84 (2), 191-215.
- Bandura, A. (1982). Self-efficacy mechanism in human agency. *American Psychologist*, 37 (2), 122-147.
- de Oliveira, S., & Nisbett, R. E. (2017). Beyond East and West: Cognitive style in Latin America. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 48 (10), 1554-1577. <https://doi.org/10.1177/0022022117730816>
- deCharms, R. (1968). *Personal Causation: The Internal Affective Determinants of Behavior*. New York: Academic Press.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). The general causality orientations scale: Self-determination in personality. *Journal of Research in Personality*, 19 (2), 109-134.
- Gould, S. J. (1999). A critique of Heckhausen and Schulz's (1995) life-span theory of control from a cross-cultural perspective. *Psychological Review*, 106 (3), 597-604.
- Han, S., & Shavitt, S. (1994). Persuasion and culture: Advertising appeals in individualistic and collectivistic societies. *Journal of Experimental Social Psychology*, 30, 326-350. doi: 10.1006/jesp.1994.1016
- Heckhausen, J., & Schulz, R. (1995). A life-span theory of control. *Psychological Review*, 102 (2), 284-304.
- Heckhausen, J., Wrosch, C., & Schulz, R. (2010). A motivational theory of life-span development. *Psychological Review*, 117 (1), 32-60.
- Hofstede, G. (2001). *Culture's Consequences* (2nd ed.). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Kim, H., & Markus, H. R. (1999). Deviance or uniqueness, harmony or conformity? A cultural analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 785-800. doi: 10.1037/0022-3514.77.4.785
- Kim, S.-Y., Lim, T.-S., Song, H., Cramer, E. M., Ahn, S., Kim, J., England, N., Kim, H.-J., & Kim, J. (2016). Healthy food and cultural holism. *International Journal of Intercultural Relations*, 52, 49-59. <https://doi.org/10.1016/>

- j.jintrel.2016.03.002
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98 (2), 224-253.
- Morling, B., & Evered, S. (2006). Secondary control reviewed and defined. *Psychological Bulletin*, 132 (2), 269-296.
- Morling, B., & Evered, S. (2007). The construct formerly known as secondary control: Reply to Skinner (2007). *Psychological Bulletin*, 133 (6), 917-919.
- Nisbett, R. E. (2003). *The Geography of Thought: How Asians and Westerners Think Differently ... and Why*. Free Press.
- 野内良三 (2008) 論説と説得—詭弁のすすめ. 言語, 37, 68-75.
- 大淵憲一・福島 治 (1997). 葛藤解決における多目標—その規定因と方略選択に対する効果. 心理学研究, 68, 155-162.
- Ohbuchi, K., Fukushima, O., & Tedeschi, J. T. (1999). Cultural values in conflict management: Goal orientation, goal attainment, and tactical decision. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 30, 51-71. doi: 10.1177/0022022199030001003
- Prunty, A. M., Klopff, D. W., & Ishii, S. (1990). Argumentativeness: Japanese and American tendencies to approach and avoid conflict. *Communication Research Reports*, 7, 75-79. doi: 10.1080/08824099009359858
- Rothbaum, F., Weisz, J. R., & Snyder, S. S. (1982). Changing the world and changing the self: A two-process model of perceived control. *Journal of Personality and Social Psychology*, 42 (1), 5-37.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55 (1), 68-78.
- San Martin, A., Schug, J., & Maddux, W. W. (2019). Relational mobility and cultural differences in analytic and holistic thinking. *Journal of Personality and Social Psychology*, 116 (4), 495-518. <https://doi.org/10.1037/pspa0000142>
- Sawaumi, T., Yamaguchi, S., Park, J., & Robinson, A. R. (2015). Japanese control strategies regulated by urgency and interpersonal harmony: Evidence based on extended conceptual framework. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 46, 252-268. doi: 10.1177/0022022114563749
- Seligman, M. E., Maier, S. F., & Geer, J. H. (1968).

- Alleviation of learned helplessness in the dog. *Journal of Abnormal Psychology*, 73 (3, Pt.1), 256-262.
- Shigaki, I. S. (1983). Child care practices in Japan and the United States: How do they reflect cultural values in young children. *Young Children*, 38, 13-24.
- Skinner, E. A. (1996). A guide to constructs of control. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71 (3), 549-570.
- Skinner, E. A. (2007). Secondary control critiqued: Is it secondary? Is it control? Comment on Morling and Evered (2006). *Psychological Bulletin*, 133 (6), 911-916.
- Skinner, E. A., Chapman, M., & Baltes, P. B. (1988). Control, means-ends, and agency beliefs: A new conceptualization and its measurement during childhood. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54 (1), 117-133.
- 竹村明子 (2010). 実践教育の効果：介護福祉士養成課程における実習体験と介護への自己決定性の関係. *教育心理学研究*, 58, 176-185.
- Thompson, S. C. (1981). Will it hurt less if I can control it? A complex answer to a simple question. *Psychological Bulletin*, 90 (1), 89-101. <https://doi.org/10.1037/0033-2909.90.1.89>
- Triandis, H. C. (2007). Culture and psychology: A history of the study of their relationship. In S. Kitayama & D. Cohen (Eds.), *Handbook of Cultural Psychology* (pp. 59-76). The Guilford Press.
- Weisz, J. R., Rothbaum, F. M., & Blackburn, T. C. (1984). Standing out and standing in: The psychology of control in America and Japan. *American Psychologist*, 39 (9), 955-969.
- White, R. W. (1959). Motivation reconsidered: The concept of competence. *Psychological Review*, 66 (5), 297-333.
- Yamaguchi, S., & Sawaumi, T. (2019). Control orientations in the East and West. In D. Matsumoto & H. C. Hwang (Eds.), *The Handbook of Culture and Psychology* (pp. 509-537). Oxford University Press.

抄 録

二次的コントロールとは、自己（個人の目標や理想）と周りの物理的・社会的環境の間で葛藤が生じた場面において、周りの環境に合わせて自己の考え方や価値観を変えるコントロールのことである。このような二次的コントロールは、欧米では諦めと解釈されるが、東アジアでは優先して用いられ人々の心理的 well-being に貢献すると考えられている。しかし二次

的コントロール概念が曖昧なことから、その定義や機能に関する考え方は研究者間で一致していない。本稿では二次的コントロールの文化差について検討するために、先ず二次的コントロールの概念の問題や現在の文化比較研究の視点について検討した。そして文化比較研究の視点、特に周りとの調和を重視する文化の視点から二次的コントロールの機能について考察を行った。

キーワード：二次的コントロール，調和，自律性，文化

